



KOKUSHIKAN

第4回

国士舘救急救命士会フォーラム

プログラム集



日 時：2025年10月11日（土） 13:00～16:50

共 催：国士舘大学体育学部スポーツ医科学科
国士舘大学体育・スポーツ科学学会

協 力：第11回日本救急救命学会学術集会

2025.10.11 SAT

国士舘大学世田谷キャンパス
メイプルセンチュリーホール

スポーツ医科学科

Instagram

FOLLOWしてね！

ノートシェア
ア

国士館大学体育学部スポーツ医科学科【公式】
🚑すごい救急救命士になれる大学🚑

386 投稿
3,830 フォロワー
203 フォロー中

個人ブログ
国士館大学体育学部スポーツ医科学科
通称：スポ医🚑🏃

【スポ医の情報... 続きを読む】
www.kokushikan.ac.jp/faculty/pe/department

実技試験

1年生
外傷活動
救急救命士を養成する
国士館大学体育学部スポーツ医科学科

実習レポート

3年生
病院実習に向けた
PPE着脱訓練
PPE: personal protective equipment

1万年後の絵はまさかの絵

Chat GPTに
未来のスポ医学生
描かせてみた

実習レポート

3年生
静脈路確保実習
救急救命士を養成する
国士館大学体育学部スポーツ医科学科

スポ医授業レポート 1/11

スポ医2年生実習授業
救急救命処置実習2

多数傷病者

スポ医1年生実習授業

救助実習

令和6年能登半島地震
災害対応

学生達の授業の様子や救護活動の様子をUPしています！！是非、ご覧ください！

KOKUSHIKAN_PARAMEDIC

kokushikan_paramedic
富士スピードウェイ

2024.01.06
スポ医救護活動
スーパーマチャリGP
in 富士スピードウェイ
国士館大学体育学部スポーツ医科学科

インサイトを見る
投稿を宣伝

いいね！: daikenkan_3231, 他129人
kokushikan_paramedic
(写真はレース開始前の訓練の様子です... 続きを読む)

国士館大学体育・スポーツ科学学会

第4回 国士館救急救命士会フォーラム

ご挨拶

国士館大学体育・スポーツ科学学会 会長

国士館大学体育学部 学部長

古田 仁志



皆さま、本日はお忙しい中、「第4回国士館救急救命士フォーラム」を開催するにあたり、皆様にご挨拶申し上げます。

本学スポーツ医科学科は、2000年に当時の学部長であられた故・大澤英雄理事長、そして初代学科主任の故・天羽敬祐先生をはじめ、多くの先生方および関係者の皆様のご尽力のもとに創設されました。以来、日本初の4年制大学における救急救命士養成課程として、全国に優秀な人材を輩出し続けています。現在までに約3,239名の卒業生が、消防機関や医療機関、教育分野など、多岐にわたる現場で活躍されています。

本フォーラムは、在校生と卒業生、そして教員との交流を深める場としてだけでなく、現場で活躍する救急救命士たちの経験や知識を共有し、学科のさらなる発展を目指す重要な機会です。今年も、多くの方々のご協力により、充実したプログラムをご用意することができました。

第一部では、卒業生で現在、本学科の教授であります高橋宏幸先生に「スポーツ医科学科の最新動向」をご紹介します。

次に「スポ医卒業生・在学生の今」をテーマに、在学生たちが日々の学びや目標について発表します。第2部では、「症例検討」として、各分野でご活躍中の3名の卒業生が発表を行います。さらに、東京消防庁救急部 部長の永野義武様による特別講演が予定されています。永野様の貴重なご経験と理解の深化に基づく講演は、在校生、卒業生ともに多くの学びをもたらすことでしょう。

第三部では、スポーツ医科学科優秀学生の表彰とスポーツ医科学科主任の牧亮先生による「スポ医懐かし授業（不整脈の読解）」と、本年度3月末で定年退職される田久浩志先生による退職記念講話も予定されています。

最後に、このフォーラムが在校生と卒業生、教員の情報共有の場となり、スポーツ医科学科の未来を切り拓く契機となることを心より願っております。

プログラム

■ 開会

13:00

古田 仁志(国士舘大学体育・スポーツ科学学会 会長)

■ スポーツ医科学科の最新動向

13:10～13:20

高橋 宏幸(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 教授)

■ 卒業生・在校生の今

13:20～14:10

司会:坂梨 秀地(国士舘大学体育学部 スポーツ医科学科 助教)

演者:

1. 「東京消防庁 救急機動部隊の任務と活動について」
千年 正晃(東京消防庁 救急部 救急指導課:スポーツ医科学科 1期卒)
2. 「救急救命士として歩んだ21年～救急現場から消防局、そして消防庁へ～」
伊藤 悟(船橋市消防局(総務省消防庁):スポーツ医科学科 2期卒)
3. 「病院救急救命士の役割～救急外来を支えるコーディネーターとして～」
藤島 璃々子(国立国際医療センター 救急科:スポーツ医科学科 10期卒)
4. 「救急救命士になるために走り続けた4年間」
大嶋 綾那(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 4年生)

プログラム

■ 休憩 14:10～14:25

■ 症例検討・研究発表 14:25～15:05

司会:高橋 宏幸(国士舘大学体育学部 スポーツ医科学科 教授)

演者:

1. 「12誘導心電図記録及び医療機関への伝送について」
小山内 健介(弘前地区消防事務組合:スポーツ医科学科 2期卒)
2. 「トンネル火災・多数傷病者発生事案について」
平田 雄也(川崎市消防局:スポーツ医科学科 12期卒)
3. 「ドクターカーの出動が患者の予後改善に寄与することができた症例」
皆藤 竜弥(日本赤十字社医療センター 救急科:スポーツ医科学科 14期卒)

■ 特別講演 15:05～15:25

司会:緒方 毅(国士舘大学体育学部 スポーツ医科学科 准教授)

永野 義武(東京消防庁救急部 部長)

■ 休憩 15:25～15:40

■ スポーツ医科学科優秀学生(GPA3.5以上)表彰式 15:40～15:55

プレゼンター:牧 亮(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 主任)

プログラム

■ スポ医懐かし授業 15:55～16:25

司 会:喜熨斗 智也(国土舘大学体育学部 スポーツ医科学科 准教授)

「不整脈の読解」

牧 亮(国土舘大学体育学部スポーツ医科学科 主任)

■ 退職教員記念講話 16:25～16:45

司 会:牧 亮(国土舘大学体育学部 スポーツ医科学科 主任)

田久 浩志(国土舘大学体育学部スポーツ医科学科 教授)

■ 閉 会 16:45～16:50

スポーツ医科学科の紹介

スポーツ医科学科の紹介

2000年4月:救急救命士を養成する日本で初めての4年生大学の学科として設立

【スポーツ医科学科の教育目標】

- 救急医療の高度化および業務拡大に対応できる救急救命士
- 日本の救急医療に貢献できる救急救命士
- 救急医療で指導的役割を担う救急救命士
- 国際的に活躍できる救急救命士

スポーツ医科学科卒業生



3,239 人

(2025年3月現在)

救急救命士国家試験合格者数



2,858 名

(現役合格者数)

消防官就職者数



全国 1 位

(参考 朝日新聞出版「大学ランキング」)



卒業生・在校生の今

司 会: 坂梨 秀地(国士舘大学体育学部 スポーツ医科学科 助教)

演者:

1. 「東京消防庁 救急機動部隊の任務と活動について」
千年 正晃(東京消防庁 救急部 救急指導課:スポーツ医科学科 1 期卒)
2. 「救急救命士として歩んだ 21 年～救急現場から消防局、そして消防庁へ～」
伊藤 悟(船橋市消防局(総務省消防庁):スポーツ医科学科 2 期卒)
3. 「病院救急救命士の役割～救急外来を支えるコーディネーターとして～」
藤島 璃々子(国立国際医療センター 救急科:スポーツ医科学科 10 期卒)
4. 「救急救命士になるために走り続けた 4 年間」
大嶋 綾那(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 4 年生)

卒業生・在校生の今

1. 「東京消防庁 救急機動部隊の任務と活動について」

千年 正晃(東京消防庁 救急部 救急指導課:スポーツ医科学科 1 期卒)

東京都の人口 1,400 万人、年間の旅行客約 5 億人。

多様で複雑なエリアが混在する首都・東京で、あらゆる災害から、あらゆる命を守るために、多様な力を団結させて、どこまで想定外をなくせるか、それが東京消防庁の使命です。

私は、平成 16 年 3 月に国士館 1 期生として卒業後、同年 4 月から東京消防庁に入庁し、現在 22 年が経ちます。現在は、特定の消防署には属さない救急機動部隊の部隊長として従事しています。当日の国士館救急救命士フォーラムでは、救急機動部隊の任務と最近の活動内容について話させていただくとともに、どのような人材を求め、育成しているかを伝えさせていただきたいと思えます。東京の未来を守るため、個々の強みや経験、想いを活かし、一人ひとりの”ちがいが”が、東京を守る強さになります。みなさんと一緒に働ける未来を楽しみにしています。待っています。

2. 「救急救命士として歩んだ 21 年 ～救急現場から消防局、そして消防庁へ～」

伊藤 悟(船橋市消防局(総務省消防庁):スポーツ医科学科 2 期卒)

私は令和 7 年 4 月から、船橋市消防局から総務省消防庁に研修生として派遣され、半年が経とうとしております。私は船橋市消防局に入局後の 5 年間は消防隊、救助隊、水難救助隊を経験し、その後 12 年間は救急現場で主に副隊長として活動し、40 歳の年に救急課へ異動、3 年間救急統計や予算編成、救急資器材の整備等の業務経験後、消防庁の国民保護運用室へ派遣となりました。消防庁の派遣期間は 2 年間で全国の消防本部から約 100 人程度の研修生が在籍しており、そのうち約半数が 1 年ごとに交代して業務を引き継ぐ体制をとっています。国民保護という言葉は普段の生活では聞き慣れない言葉だと思えますが、武力攻撃や大規模テロなど国の安全に関わる緊急事態が発生した際に、国民の生命・身体・財産を守るための仕組みや取り組みの総称です。私はその中で各都道府県が国と共同で実施する国民保護訓練の調整業務を主にしています。

私の今までの経験や、消防庁に派遣されてからの半年間で経験したことや感じたことを皆様にお伝えすることで、これから消防への就職を考えている方や現在消防で勤務している方達の参考となれば幸いです。

3. 「病院救急救命士の役割 ～救急外来を支えるコーディネーターとして～」

藤島 璃々子(国立国際医療センター 救急科:スポーツ医科学科 10 期卒)

現在、国立国際医療センター救急科に勤務して4年目となる。ER型の救命救急センターとして年間1万件以上の救急車を受け入れており、救急救命士は「救急外来コーディネーター」として救急搬送連絡の対応、ベッド配置、トリアージ、医療機器の準備や救急外来全体の安全管理などを行っている。救急搬送連絡時間は都内最短の平均3.7分であり、二次の受入判断を救急救命士に一任されているのが大きな要因となっている。また救急患者連携搬送料の開始に伴い連携病院への転院搬送を行っており、多い月で69件に及んだ。新宿区という立地から薬物中毒、精神疾患、外国人患者など多様な症例を経験できることも特徴である。他にもICLS、JPTECや実習生の指導、日本DMATでは能登半島地震、東京DMATでは多数傷病者対応などへ派遣されている。カンボジアでの救急医療体制支援やノルウェーへの感染症対策の視察など国際協力活動にも参加している。患者対応だけでなく、救急外来全体を見渡して安全管理を行う重要な役割を担っており、日々の業務を通じて責任感ややりがいを実感している。進路の一つとして医療機関で働く救急救命士の役割や働き方のイメージを持ってもらう一助になれば幸いである。

4. 「救急救命士になるために走り続けた4年間」

大嶋 綾那(国土舘大学体育学部スポーツ医科学科 4年生)

大学四年生となり、大学生生活も残りわずかとなった。四年間を振り返ると、目まぐるしくも充実した日々を送ってきたと感じる。私は、医療職の中でも最も早く困っている方に寄り添うことのできる職業である救急救命士を志し、この四年間努力を重ねてきた。中でも自分自身を最も奮い立たせた経験は、水難救助実習である。傷病者の立場に立つことの大切さ、そして救急救命士としての覚悟がこの実習を通して芽生えた。今でもこの経験を思い返すと初心に立ち返ることができる。

学内ではJPTECK研究会に所属し、主将として活動した。二年次からは東日本学生救急救命技術選手権への出場を目指し、毎日実習室で練習を重ねた。昨年度は代表隊として校内予選を通過し、大会で総合優勝を果たすことができた。学外では、BLS活動やマラソン救護、Jリーグのサッカー救護などに積極的に参加した。特に初めてのサッカー救護では、救命士の接遇面での対応に深く感銘を受けた。

これらの経験を通して、限られた時間の中でも傷病者一人ひとりの予後を見据えて行動できる救急救命士になりたいと強く感じている。また、接遇面においても、傷病者だけでなく現場に関わるすべての人に寄り添える人間でありたい。そして、これまで多くの先輩方や先生方、卒業生の方々から大きな影響を受けてきたように、今度は自分自身が後輩や周囲の人々に良い影響を与えられる存在になっていきたい。

症例検討・研究発表

司 会: 高橋 宏幸(国士舘大学体育学部 スポーツ医科学科 教授)

演者:

- 「12誘導心電図記録及び医療機関への伝送について」
小山内 健介(弘前地区消防事務組合:スポーツ医科学科 2期卒)
- 「トンネル火災・多数傷病者発生事案について」
平田 雄也(川崎市消防局:スポーツ医科学科 12期卒)
- 「ドクターカーの出動が患者の予後改善に寄与することができた症例」
皆藤 竜弥(日本赤十字社医療センター 救急科:スポーツ医科学科 14期卒)

症例検討・研究発表

1. 「12誘導心電図記録及び医療機関への伝送について」

小山内 健介(弘前地区消防事務組合:スポーツ医科学科 2 期卒)

弘前地区消防事務組合(弘前消防)は、2025年4月現在、約26万人を管轄している。三次救急医療機関である弘前大学医学部附属病院が PCI 可能医療機関である。弘前消防は救急車15台で対応していたが、2024年からは日勤救急隊を転院搬送のみで暫定運用し、平日日中は16台で運用している。主な12誘導心電図測定資機材は旭化成ゾールメディカル社製「X シリーズ」とグッドケア社製「富士の国心電計」である。2015年から12誘導心電図測定が可能になり、除細動器に12誘導心電図測定及びメール伝送機能が付加された。急性冠症候群傷病者の搬送に占める12誘導心電図測定の割合は増加しており、心原性心肺停止事案での自己心拍再開後の原因検索に12誘導心電図測定が実施されることや交通事故現場での使用例もあり、救急活動における12誘導心電図測定が標準的に実施されつつある。今後の課題としては心電図電極シールの貼り方の工夫、救急救命士の測定判断のばらつきの改善、循環器専門医との連携強化が挙げられるが、救急現場で心電図測定を実施することの相互理解を深めるためには、救命士教育の段階から標準化される必要がある。

2. 「トンネル火災・多数傷病者発生事案について」

平田 雄也(川崎市消防局:スポーツ医科学科 12 期卒)

私が現在所属している川崎市消防局では、縦長で臨海地区を有する市内に8消防署、28出張所を設置し、職員数は約1460人。川崎市は政令指定都市に属しており、近年人口が増加しており、発生する災害も様々なものがあり日々業務にあたっている。

私自身は、スポーツ医科学科を12期で卒業したのち、同局に奉職し消防隊1年経験したのち現在に至るまで救急隊として勤務している。川崎市には、スポーツ医科学科の卒業生が多く所属しており、救急隊だけでなく、消防隊や救助隊、特別高度救助隊など様々な部署で活躍している。

これまでに経験した事案で学んだことや感じたことを皆さんにお伝えし、今後の進路での活躍の一助となれば幸いである。

3. 「ドクターカーの出動が患者の予後改善に 寄与することができた症例」

皆藤 竜弥(日本赤十字社医療センター 救急科:スポーツ医科学科 14 期卒)

日本赤十字社医療センターは東京都渋谷区に位置し、許可病床数 693 床と 41 の診療科目を有する保険医療機関である。そして、東京都区西南部地域(渋谷区・世田谷区・目黒区)医療圏に位置する地域基幹病院であり、救急告示病院、救命救急センター、総合周産期母子医療センター、地域がん診療連携拠点病院、地域医療支援病院、災害拠点病院を担っている。

当センターでは、2020 年 10 月 1 日にドクターカーの運行が開始され、車両は患者の搬送機能を持たないラピッドレスポンスカーである。現在は日曜と祝日を除く 9 時から 17 時の時間帯に運行しており、年間約 300 件出動している。最小活動人員は医師 1 名、看護師 1 名、救急救命士 1 名の合計 3 名である。

ドクターカーにおける救急救命士の役割は、現場までの緊急走行、スタッフの安全管理、救急救命処置、医師の処置介助、院内の後方支援との情報共有、患者家族など関係者の対応、救急隊・消防隊との情報共有など、多岐にわたりロジスティックとしての活動も求められる。

当センターのドクターカー事案において、ドクターカーが出動したことで患者の予後改善に寄与することができたと考えられる症例について報告する。

退職教員記念講話

司会: 牧 亮 (国土舘大学体育学部 スポーツ医科学科 主任)

田久 浩志 (国土舘大学体育学部 スポーツ医科学科 教授)

退職教員記念講話

田久 浩志(国土館大学体育学部スポーツ医科学科 教授)



～略歴～

1978年 慶應義塾大学 工学部 電気工学科 卒業
1993年 東邦大学 医学研究科 博士課程 医学博士
2013年 国土館大学体育学部スポーツ医科学科 教授
国土館大学大学院救急システム研究科 教授

～担当科目～

物理学の基礎
総合リテラシー
臨床解剖学
救急処置実習E(海外実習)
卒業研究 1
卒業研究 2
救急業務統計・情報処理特論
データサイエンス特論 I・II
救急・蘇生統計学特別研究
救急倫理・統計・プレゼンテーション演習 I・II

スポーツ医科学科の誕生 – その生まれ出る苦しみ –

天羽 敬祐

Keisuke AMAHA

プロローグ

「国士館大に新しい4年制の学科ができるようなんですが、先生行って手伝ってやりませんか」

当時、東京医科歯科大の医学部教授だった僕のところへ、医学部長の佐藤達夫君がこんな話が持ち込んできたのは、平成8年の3月頃だった。

僕が定年を迎える二年前である。定年後をどうするかは、漠然と考えてはいたがまだはっきりした計画はなかった。

国士館大については全く無知だった。それまで横浜市大、東北大、医科歯科大と医学部畑を歩んできた僕には、国士館といえば右翼とか体育系とかいう言葉が思い浮かぶ程度の知識しかなかった。知識が無いから持ち込まれた話の内容の良し悪しは判断できなかった。

しかし国士館大に救急救命士のための学科が本当にできるのか、甚だ疑問に思ったのは確かである。「考えておきます」と一応佐藤医学部長には言ったが、正直の所、行く気はあまりなかった。

数日後、当時の文部省の事務官から電話が入った。「先生、適任ですよ。行ってやって下さいよ」その頃、僕は文部省の大学等設置審議会など幾つかの委員をしていて、この事務官は顔見知りで、大そう仕事熱心な男だった。

昔の国士館とは違います、と事務官は何度も強調

していた。

平成8年5月31日午前、国士館大の松島理事長、大門代表理事以下数名の理事が東京医歯大を訪れ正式に学科開設の援助を依頼してきた。

新学科の構想は以下のようだった。

国士館の体育学部内に高度の知識を持つ救急救命士を育成する4年制の新学科を作る、建物は新築し、必要な設備などは出来る限り当方の要望に沿って整える、開設は平成10年春、等々である。

僕の定年は平成10年3月末だから時期的にもちょうど良い。

もちろん本邦初の試みである。やり甲斐がありそうだと思った。

僕は承諾した。

退官後も同じ医療畑で働くより、苦労は多いだろうが少し違った領域で働いてみるのも新鮮な経験ができて面白いかも知れない、と考えたからである。

挫折

平成9年。穏やかな正月だった。1月の17日、新学科に就任予定の教職員が集まって、表参道の南国酒家で新年会を開いた。新しい学科への希望と期待に、皆、話が弾んだ。

一年半後の学科新設を目指して僕はゆっくり活動

を開始した。一年以上もある、と思っていた。教職員の人选、カリキュラムの作成、実習器具の選定、建物の基本的な構想などなど、やることはいくらかもあったが、まあ、のんびりやろうと気楽に構えていた。

だが世の中そんなに甘くない。数週間後、深刻な問題が起きた。

国士館には、政経、文、工、体など五つの学部があったが、新学科は体育学部内に設置することになっていた。ところが、体育を除くすべての学部が新学科設置に反対を表明したのである。

学科新設は理事会の決議である。理事会は必死に各学科を説得した。

が、一度燃え上がった反対の火の手はなかなか消せない。理事会は力尽きてとうとう2月12日の会議で開設を一年先送りにすることを決めた。国士館の開設準備室にいた野田牧生氏がその日のうちに僕にこの話を伝えてきた。

僕は激怒した。

「腰抜け理事会め！自分で決めたことを自分で反古にするとは何たるザマだ」

国士館にどんな内部事情があるかは知らない。しかし少なくとも理事会は、大学の進路を決める最高の決議機関ではないか。その決議が、一年も経たないうちにまた同じ理事会で変えられてしまう。許しがたい背信行為だ、と思った。

翌日の夕方、大門代表理事らが医科歯科大の僕の教授室にきた。延期の理由を詳細に説明し、何度も詫びを述べてから帰って行った。

皆が帰ってから僕は秘書も帰し、暫く一人で教授室に残っていた。一人になって今後のことを少し考えたかった。

ぼんやりとパイプを吸いながら、教授室の窓から夕暮れの御茶ノ水橋の雑踏を見ていた。

迷っていた。

新学科の計画は挫折した。どうしようか。

もうすこし様子を見るべきか、断るべきか。

しかしそれにしても、大学の理事会が決めて他の大学にまで正式に援助を依頼した計画を、そんな

に簡単に変えられるのか。常識的には考えられない事態で、大学の社会的信用は失墜するに違いない。

しかし恐らく国士館には出来ないだろう。こんな意気地のない理事会ではどうせ一年後もだめだろう。早いところきっぱり縁を切って、いま誘われている病院へ行くことを考えたほうが良いかも知れない、と思った。だが辞意を申し出る前に、もう一度松島理事長に会って話を聴き、僕の言いたいことを言ってからじゃないと、何となく腹の虫が治まらない、とも考えた。

僕は松島理事長にアポを取るように秘書にメモを残し、部屋を出た。

「一年後に申請いたします」

平成9年頃の僕は多忙だった。麻酔科教授として毎日の臨床と研究の指導をし、その外に手術部長、救急部長、集中治療部長、それに幾つもの院内の委員長をやり、学会や文部省や厚生省の仕事も多かった。

一週間の内に、福岡、大阪、札幌と出張したこともあった。

そんな過密なスケジュールの間隙を縫って、松島理事長に会ったのは、一週間後の2月18日の夜、場所は世田谷の理事長室だった。

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません」

小柄な理事長は小さな声で何度も同じ詫びの言葉を繰り返した。

飾り気のないトットツとした話しぶりに、新学科反対派と僕との間に挟まれて、動きの取れない理事長の苦悩が滲み出ている。

誠実そうな老人で、好々爺という印象だった。また何となく憎めない人だ、とも思った。

僕は理事会の無責任さを激しく非難した。

が、いくら非難しても畢竟、話はそれまでで進展はない。

理事長の口も重い。いうべき言葉がなかったのだろう。

「この儘では納得できません」

最後に僕はやや強い口調でいった。一年後というなら、それを保障する証を示して欲しい。一年、また一年と延ばされるのはやり切れない。国士館がある程度はしっかりした見通しをつけてくれないと、我々としても対処に困る、と僕はいった。

「分かりました、一週間ほど待って下さい」

松島理事長のこの言葉を聞いてから、僕は理事長室を出た。夜の風が肌を刺すように冷たかった。2月26日夜、松島理事長、三浦学長などと湯島のガーデンパレスで会った。開設準備室の野田さんも同席した。

「これで何とか納得してください」

話が一段落すると、松島理事長はそうって一枚の紙を僕に渡した。

理事長印の付いた松島博の名で、「平成10年4月に救命健康学科の開設申請を行います」と書いてあった（当初、新学科の名称は救命健康学科だった）。

平成9年申請を1年延ばし、その間に学内の反対派を説得し、平成10年に新学科の開設申請をするというのである。

理事会に非があるとはいえ、一年延期を認めてしまった現段階で出来ることは、この理事長公印のあるお墨付きを頂くのが精一杯なのかも知れない。まあ、こんなところで手を打つか——。それまでの猛々しい僕の闘争心はこの一片の紙切れでかなり軟化していた。

一本の電話

平成9年3月3日、夕刻、大門代表理事から電話が入った。

電話の内容は概要次のとおりだった。

（理事長が確約書を出したが、学内の情勢は大変厳しい。一年後に申請できる見通しは全くない。これ以上ご迷惑をかけることはできないので、この際先生も新学科設立の計画から撤退されることをお勧めしたい）

僕は自分の耳を疑った。何ということだ。先週、

理事長から来年に申請書提出という確約書を貰ったばかりなのに——。

大門氏は僕への親切心から、学内事情を知る人間として敢えて理事長の意向を無視して忠告してくれたのだろう。

しかし、この撤退勧告は沈静化していた僕の闘争心に再び火をつけた。

僕を含めて何人かの人生を変えるかも知れない大事を、こうも軽々しく変転させる理事会のいい加減さ、無神経さに腹が立ったのである。

よーし、こうなりゃ徹底的に戦ってやるぞ、と思った。

翌日早朝、僕は出張で九州福岡のホテルにいる大沢英雄先生（当時、体育学部長）に電話した。

大門氏からの電話の件を話し、忌憚のない学部長の意見を聞かせて欲しい、といった。もし大沢先生も大門氏と同じ意見なら即刻、国士館から手を引く積りだった。

だが大沢先生の考えは大門氏とは違っていた。

（私も頑張るから、先生も撤退など考えず頑張ってください）

大沢先生とは10分ほど話したが、この会話は、僕の気持ちに少なからず安らぎを与えてくれた。

その日の夕刻、新学科就任予定者の全員に文部省近くの霞山会館に集ってもらい、今までの経緯を詳細に報告した。もちろん、大門氏の電話のことも話した。そして最後に、もしこのまま新学科の話がダメとなれば不本意だが理事長の確約書をもとに法的に争う積りです、と言った。本当にやる積りだった。

長期戦になる、そう思った。

新学科設立の願望

国士館学内の軋轢は相変わらず続いていたが、僕らはとにかく平成10年の申請を目指して着々と準備を進めた。野田氏は週に2、3度必ず僕の教授室に相談に訪れ、ついでに国士館の状況を知らせてくれた。彼の飄々とした姿は忘れられない。

国士館の方の進捗状況は思わしくなかった。僕ら外の人間には理事会、体育学部、他学部の反対派が混然と入り乱れて誹謗しあい、反対を唱え、抜き差しならない事態になっているように見えた。僕らと理事との会合も頻繁に行われたが、僕らが理事会の優柔不断をなじり、僕も時には声を荒げて理事長に迫ることもあった。会合の場所は虎ノ門の霞山会館が多かった。今でも僕はあの場所を通るたびに、当時の不快な思い出が甦り、憂鬱な気分になる。

それからの一年は、会合に会合を重ねて得る物は何もなかった時期で、記述に値しない。

この間、就任予定者で内科学担当の後輩、藤原秀臣君が国士館の煮え切らない態度に業を煮やして辞めていった。残念だがやむ得なかった。

僕も友人や先輩から、そんなところ早く辞めちまえ、と何度も言われたし、自分でも辞めよう、と思ったことが何回かある。しかし途中で簡単に放り出す訳にはいかなかった。すでに現職を辞めて国士館に来ることを決めている人がいたからである。

それにもう一つ大事な理由は、この学科の新設に携わっているうちに、これが日本の救急医療に革命的な新風を送り込む原動力になるかも知れないと思うようになっていたことである。教職員を揃え、カリキュラムを組み、校舎の見取り図を眺めているうちに、新学科が既成の概念として僕の心の片隅に住みついたようになっていた。

(何としても新学科を作りたい)

いつしかそれは僕の願望に近くなっていた。

ようやく申請

結局、大門氏が予想したごとく、平成10年の学科申請はできなかった。

憤懣やるかたない思いだったが、ここまできたら最後の決着を見届けないと気持ちの治まりがつかなかった。

大沢学部長の勧めもあって僕と竹中君は平成10年

4月から、体育学部教授として勤務し、学内から新学科設立を推進していくことになった。

憂鬱な毎日が続いた。慣れない環境、先の見えない新学科、臨床を離れた寂しさ、等々、明るい話はなかった。この時期、渡辺剛教授、福本正幸事務官がいろいろと僕の世話をしてくれ、ずいぶん力づけられた。

平成10年2月には体育学部教授会が理事会と学長の不信任を決議したりして紛糾は続いていたが、僕が赴任した頃から事態は僅かづつだが確実に変わってきていた。

敵役だった親愛なる松島理事長は病を得て退陣し、理事も変わり、平成10年4月から新しく西原春夫氏が理事長に就任した。また学内の反対派の勢いも何となく衰退して行ったようだった。

潮の引く時期だったのかも知れない。

と同時に体育学部の新学科を認めようという気運も、少しづつだが芽生えてきたようだった。話し合いが良い方向に向かっているという情報は、時折、福本事務官や渡辺教授が教えてくれた。

その後もいろいろと紆余屈曲はあったが、当初の予定より二年遅れの平成11年4月、ついに新学科の開設申請が行われた。

学内の軋轢を避けるため、学科名も「スポーツ医科学科」という当初考えていたのとは全く違う名前になった。しかし正直の所、もう名前なんかは二の次だった。大事なことは出発させることだった。

開設までの二年間、国士館大理事会とのやり取りを除いて、最も苦勞したのは人事だった。とくに臨床系の教官採用は難航した。臨床を辞め教職に就く、熱意のある人材はなかなかいなかった。先輩、同僚、後輩と、あらゆる人脈を使って人探しをしたが適当な人材は見つからなかった。これはと思う人物もたまにいたが面接してみて、大抵はがっかりすることが多かった。

人材難から、一時は学科新設を諦めかけたこともあった。

そこに救世主が現れた。

杏林大理事長の松田博青先生である。彼は数十年来の畏友だが、僕の苦境を知ってすぐに学内から、内科二名と救急医学二名の、講師クラスの優秀な人材四人を送り込んでくれた。救われたと心底から思った。

今でも僕はこの学科新設の最大の功労者の一人は松田博青先生だと思っている。

新学科スタート

学生が集まるかどうかという我々の心配は杞憂に終わった。新学科の入試競争率われわれの予想を遙かに超えて高いものだった。

平成12年4月、真新しい4階建ての建物に、第1回の新生を迎えた。入学式やオリエンテーションなど幾つかの行事があったが、それらの行事の場で僕は、長い苦勞の末やっとここまで漕ぎ着けたという感慨はあったものの、喜びはあまりなかった。

(よかったですね、嬉しいでしょう)

と多くの人から言われた。しかし嬉しさはなかった。

代わりに僕の体には適度の緊張感が満ちていた。日本の救急医療を飛躍的に発展させる有為の人材をこの国士館で育成する。その第一歩が始まったんだという思いが強かった。そしてその責任者としての使命感を思っ緊張していた。

いろいろな出来事があった

厳しい競争率を通過してきた学生約160名と、教職員16名で新学科スポーツ医科学科が始まった。教師も学生も戸惑うことの多い試行錯誤の連続だった。その間、紙面には到底書き尽くせないほど、いろいろな出来事があった。

振り返ってみると、苦しかったことより楽しいこと、感激したことの方がずーと多かったように思う。学生たちは乾いた砂に水を注ぐように知識を吸収し、教職員は熱心に教育した。教員と学生

との交流も実に円滑だった。それは29年間の僕の医学部教授時代には経験したことのない新鮮な体験だった。

医学部の学生とはスポ医の学生のように親しみを込めて挨拶を交わしたり、話をしたことは殆どない。向こうから挨拶されたことも少なかった。

僕だけかもしれないが、今考えると不幸なことだったと思う。

卒業間近い学生と話し合っ、人間は教育によってはこんなにも立派に成長するものなのか、と驚いたことがある。高校出たての初々しい新入生が、4年経つと知性と自信に溢れた素晴らしい青年になる。教育の力の凄さを改めて思い知らされた嬉しい経験も少なくない。

悲しい出来事もあった。中でも椛沢靖弘君の死は最も痛ましかった。

椛沢君は医科歯科大の後輩で小児科医だったが、国立病院の医長の席を捨てて新学科に参加してくれた人である。明朗で教育熱心な男だった。

平成15年1月末、彼から病気のことを聞き大変驚いた。入院したときは既に手術適応はなかったが、それでも彼は必死に病と戦った。しかし一年後の平成16年2月8日に夭折した。惜しい人材を失った。

最後に見舞ったとき、「先生もう一度教壇に立ちたいです」、と泣き崩れた彼の姿を僕は終生忘れないだろう。せめてあと2ヶ月命を長らえて、我々が育て上げた国士館大スポーツ医科学科第一回卒業生の晴れ姿を彼に見せてやりたかった。

今思うこと

平成9年から11年にかけて起こったあの騒動は一体なんだったのだろうか。僕を含めて大勢の人々が膨大な時間とエネルギーを費やし、怒りと誹謗を繰り返したあの時期は一体何だったのか。

すべては時の流れにかき消され、詳しいことはもう分からない。

あれは恐らくスポーツ医科学科という本邦初の新学科の生まれ出る苦しみだったのかも知れない。逆にいえば、ああいう苦しみ過程が新学科誕生には必要だったのかもしれない。そう考えると、あの騒動の頃が何とも懐かしい感じと共に思い出されるのは筆者一人だろうか。

スポーツ医科学科はその後順調に発展し、国士館は今や救急救命士の養成校としては質、量とも本邦のナンバーワンになった。ご同慶の至りである。しかし問題はこれからである。

ナンバーワンであり続けることは、ナンバーワンになることより遥かにむずかしい。本邦最高の救急救命士養成大学の地位を如何に堅持していくか、これからが勝負どころだろう。

現在、東京消防庁など各地の救急への就職には毎年、本校卒業生が数十名が合格している。東京消防庁に同一大学からこれほど多くの合格者が入るのは同庁の歴史始まって以来と聞いている。この勢いで行くと、近い将来、日本の救急救命士の領域を国士館大卒業生が席卷するのではなかろうかと、秘かな期待を持って成り行きを見守っている。それと同時にあの騒動の原因となったこの学科が、計画倒れで生まれてこなかったかも知れないこの学科が、ここまで立派に成長したかと思うと、まことに感慨無量のものがある。

(この文は一個人の主観的な回顧録である。不適切な表現や、年月日、場所などに不正確な点があるかもしれない。お許しを頂きたい)



国士舘大学